

記紀神話の受容(二)

神 田 典 城

前章まで、出雲国風土記の記述が、記紀神話に記された出雲に関わる事どもの中で、出雲にとって「都合が良い事柄——正の面——」は生かしている事を述べた。これは、記紀神話と出雲国風土記とに共通する記載内容を検討して得られた結果であった。

そこで本稿では、逆に両者の間で通い合わないと思われる事柄について見てみたい。

5 「負」の面から——オホナムチの系譜——

記紀神話の中で、出雲に深い関わりをもって登場する神に、前稿(「記紀神話の受容(一)」)で見たオホナムチ注1と共にもう一柱、スサノヲがある。

即ち記紀に共通して記すところによれば、スサノヲは、アマテラス・ツクヨミと共に最もすぐれた神(古事記に謂わゆる三貴子)として誕生する。ところが、父神イザナキに託された領域を統治することもせず、為にイザナキにより、根の国へと逐われ、更に加えて、アマテラスの領する天上界で乱暴狼籍をはたらき、天上界からも追放される。かくして、父と姉から重ねて追放された身が、根の国へ赴く途上というところで展開されるのが、出雲に於ける、ヤマタノヲロチ退治を中心とした、スサノヲにまつわるエピソードである。

ところで、出雲国風土記にも・スサノヲの関わる伝承は、他の神々に比して少なからず録されている。スサノヲ自身に関わる記事四条、御子神の名を記すもの八条というのは、オホナムチ(圧倒的に多い)を別格として、当国風土記

の中では抜きん出た数と言える。ところがこのスサノヲの場合、前章までに見たオホナムチの場合とは異って、それらの記事内容は、記紀に描かれたスサノヲが、出雲世界に關わつて果す重要なポイントに於て、ほとんど呼応するところがない。

実はこの点が、従来は記紀と出雲国風土記との相違として強調もされ、論議を呼んでもいたわけだが、^{生2}私見によれば、スサノヲの記紀に於ける役割は、出雲の側に立つならは決して好ましいものではなかったと思われ、そこに、出雲国風土記に「書かれなかった（呼応する記述がない）」理由があると考える。

まず記紀神話の中で、出雲という領域とスサノヲとのあり方を見た時に、大きなポイントの一つとして数える事ができるのは、系譜的な面に於ける位置づけである。

即ち、ヤマタノヲロチを退治した後、スサノヲは、救ったクシイナダヒメと結婚し、その結びつきからオホナムチが生まれる事になる。

素戔鳴尊、勅して曰はく、「若し然らば、汝、當に女（『クシイナダヒメ』）を以て吾に奉れむや」とのたまふ。對へて曰さく、「勅の隨に奉る」とまうす。（以下ヤマタノヲロチ退治―略）然して後に、行きつつ婚せむ處を覓ぐ。遂に出雲の清地に到ります。乃ち言ひて曰はく、「吾が心清し」とのたまふ。（割注―略）彼處に宮を建つ。（割注―略）乃ち相与に連合して、児大己貴神を生む。（日本書紀第八段本文）

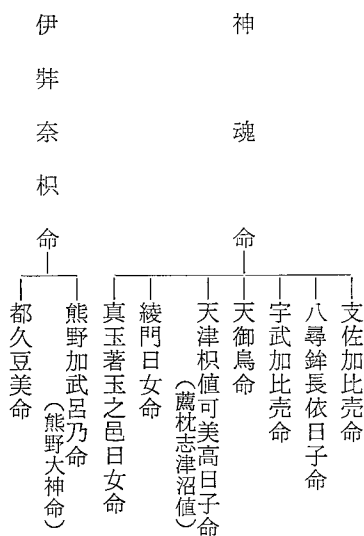
素戔鳴尊、天よりして出雲の簸の川上に降到ります。則ち稻田宮主簀狭之八箇耳が女號は稻田媛を見て、乃ち奇御戸に起して生める児を、清の湯山主三名狹漏彦八嶋篠と號く。（中略）此の神の五世の孫は、即ち大国主神なり。（同右一書第一）

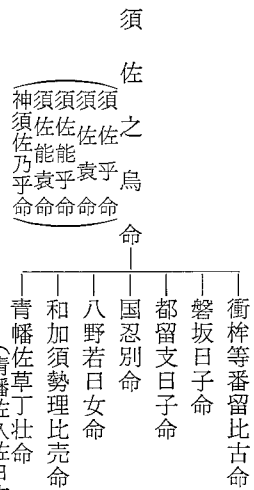
素戔鳴尊、安芸國の可愛の川上に下り到ります。彼處に神有り。名をば脚摩手摩と曰ふ。其の妻の名をば稻田宮主簀狭之八箇耳と曰ふ。此の神正に姪身めり。（以下ヤマタノヲロチ退治―略）是の後に、稻田宮主簀狭之八箇耳が生める兒眞髮触奇稻田媛を以て、出雲國の簸の川上に遷し置ゑて、長養す。然して後に、素戔鳴尊、妃としたまひて、生ませたまへる児の六世の孫、是を大己貴命と曰す。（同右一書第二）

速須佐之男命、其の老夫に詔りたまひしく、「是の汝の女をば吾に奉らむや。」とのりたまひしに、(中略)足名椎手名椎神、
 「然坐さは恐し。立奉らむ。」と曰しき。(以下ヤマトノヲロチ退治一略)故是を以ちて其の速須佐之男命、宮造作るべき地を
 出雲に求きたまひき。(中略)故、其の櫛名田比売を以ちて、久美度遷起して生める神の名は、八島土奴美神と謂ふ。(中
 略)八島土奴美神、大山津見神の女、名は木花知流比売を娶して生める子は、布波能母遲久奴須奴神。此の神、速迦美神の
 女、名は日河比売を娶して生める子は、深淵之水夜礼花神。此の神、天之都度聞知泥神を娶して生める子は、淤美豆奴神。
 此の神、布怒豆怒神の女、名は布帝耳神を娶して生める子は、天之冬衣神。此の神、刺国大神の女、名は刺国若比売を娶して
 生める子は、大国主神。(古事記)

このように、伝によってそれぞれ相違を見せているものの、記紀の各所伝では、明瞭に、スサノヲとオホナムチを
 タテの関係(直系)に系譜づけて話を展開させている。^{注3}

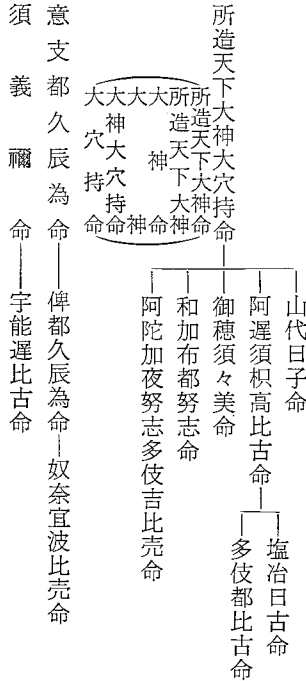
また、これは後で取り上げるが、古事記には、オホナムチがスサノヲの娘セリビメを正妻とする事も見えている。
 一方、神の系譜という点について出雲国風土記の記事を見ると、神々相互の親子関係、また婚姻関係に触れた記述
 はかなりある。それらのうち、親子関係を加藤義成氏が図式化されたものがあるので、左に掲げてみよう。^{注4}





八束水臣津野命
(意美豆努命)

赤衾伊努意保須美比古佐倭氣能命
(赤衾伊濃意保須美比古佐和氣能命)



出雲國風土記からは、これだけの系譜（婚姻関係を除いた、親子関係を示すもの）が復元できるわけだが、これらの中に、記紀に示された如きササノヲとオホナムチのタテ（直系）の関係について見ると、その事を示唆するような要素がここには全くない。

即ち、日本書紀の本文という重要な所伝にあって、ササノヲとオホナムチは親子となっている。ところが、風土記

記事にスサノヲの子である事が示されている神は七種の多きを数えているにも拘らず、その中にオホナムチの名はない。ただし、書紀の一書及び古事記の如き、両神の間に数世代を経たようなタイプという事で見比べるなら、風土記の書きようからしてヌナガハヒメやヤマヤヒコ等の事例の如く、三代くらいを示すのが限度らしく、そうとすれば、風土記紙上に表われていないのは当然とも言える。

しかし仮に、出雲国風土記編纂作業周辺の人々が、日本書紀本文より古事記の記述を重視、ないしは古事記のように幾世代かを経たというタイプのものを認めていたとして、例えば古事記には、具体的にスサノヲとオホナムチの間を継ぐべき神々の名が、いちいち記されている。また、日本書紀の一書を見るに、一書第二に見えるスサノヲの御子の名「――八嶋篠^{ヤシノ}」は、古事記の系譜に八島土奴美神^{ヤシノヌミカミ}とあるスサノヲの御子神と同神として良く、更に、一書第四にはスサノヲの五世の子孫として、古事記系譜のヤシマシヌミから数えて五番目に当る天之冬衣神^{アメノフユキミ}を思わせる、天之葺根神^{アメノフキネ}の名が記されており、こうした事例からすれば、書紀の一書に「オホナムチをスサノヲの六世の孫」としている背後にも、古事記^{注5}に示された系譜の如きものの存在を想定して良からう。

そこでこの古事記の系譜を見ると、オホナムチ（＝大国主神）の二代前にオミヅノ（淤美豆奴）の名が記されている。このオミヅノは、出雲国風土記に有名な「国引き」の神であるオミヅノ（八東水臣津野命^{ヤシノ}）と名を同じくしているわけで、同神は当国風土記にあつて有力な神のうちの一柱で、その名も何度も記されているのだから、スサノヲからオホナムチに至る系譜の全てはともかくとして、このオミヅノからオホナムチへの連なりぐらゐは、風土記で記す事のできる範囲と見ることができよう。ところが実際には、それも全く見られない。

つまりここに、少くとも出雲国風土記の記述には、記紀的な世界に構築された如き^{注6}、スサノヲとオホナムチをタテに結ぶ系譜関係を類推させるような要素が見出せないという事実が確認できるのである。

ところで、記紀的に構築された神話世界を出雲国風土記の側が知っていただろう、という事は、前稿に述べた。とすれば、そのような神話世界にあつて、決して軽くないと思われる（後述）「スサノヲからオホナムチ」へと結ばれたタテの系譜関係に顧慮していないというのは、あやしむべき一事ではないだろうか。

例えば、前稿で見たアメノホヒの記載のようなものもあるわけで、それに対してこの場合など、神の名を記す

のに、「○○神の御子」とする形式が、当国風土記では、ごくありふれた記述として存在するのだから、風土記編纂者の側にその気さえあれば、オホナムチの名を何度か記す、そのどこかに「スサノヲの御子」、あるいは「オミヅノの御子アメノフユキヌの御子」といった文言を添える事は、容易いわざであつたに相違ない。が、実際にはそのような記述は行われていない。

総じて、風土記に見られる如き、神々の親子関係などは、神の信仰圈、またその神を奉祭する集団の勢力の拡がりといったものの反映として解されるわけで、その限りでは、当国風土記のオホナムチのありようも、そのレベルのものであつて「実際に⁷出雲ではそうなつていた」として、殊更にあやしむべき筋合いではないかもしれない。しかしながら、記紀神話の展開の中に於ける「出雲」という領域のあり方、スサノヲ・オホナムチ両神の果す役割の重要さ、加えて何度も繰り返すが、前稿で述べた如く、出雲国風土記の記述に、オホナムチについて、ある部分では、記紀的な世界に示されたものを取り込んでゐる事が見て取れる事などを総合して見るならば、その出雲国風土記の記述が、オホナムチの出自について、スサノヲに発する事が記紀に明らかに示されているにも拘らず、それに対して全く関心を払っていないという事実には、もっと注意を向けて良いだろう。

そして実は、同じような事はまたスサノヲについても言えるのである。即ちこのスサノオがイザナキの子である事も、記紀の世界では重要なポイントに違いない。ところがこれも、出雲国風土記にイザナキの御子神の名が記されているに拘らず、スサノヲとの関係は示されていない。

いったいに、記紀的な神話世界の展開は、イザナキ・スサノヲ・オホナムチという系譜を軸として、国土創造―高天原世界―出雲世界、更に天孫降臨へと進行しているわけで、この三神のタテの系譜はそれぞれの場面をつなぐものとなっている、記紀神話の骨格をなすと言っても良いほどのものである。

しかしそれでは、この記紀に構築された三神の関係を、出雲の側に立って見たらばどうだろうか。

オホナムチが、「国を作った偉大な神」としてある事は既に見た。それに対してスサノヲが、記紀にあつていかなる立場にあるかと言へば、はじめに触れた如く、二重に逐われた者であつた。筆者は別稿にて、記紀のスサノヲについて、次の如く論じた。^{注7}

即ち、スサノヲは親神から命じられた領域の支配に赴かず、ひたすらに哭きわめき（日本書紀第五段一書第六と古事記は、その理由を亡母を慕つての事とする）、その結果として山々の木々は枯れ、河海の水は干上るといふ、自然の秩序の破壊を惹き起こして親神の怒りをかい、根の国へ追放される。

更に、根の国への途次、天上界へ登り行き数々の乱暴をはたらいて、アマテラスの天の岩戸隠れを惹き起こす。

天照大神、天狭田・長田を以て御田としたまふ。時に素戔鳴尊、春は重播種子、且畔毀す。秋は天斑駒を放ちて、田の中に伏す。後天照大神の新嘗しめす時を見て、則ち陰に新宮に放尿。又天照大神の方に神衣を織りつつ斎服殿に居しますと見て、則ち天斑駒を剥ぎて、殿の蹠を穿ちて投げ納る。是の時に、天照大神驚動きたまひて、梭を以て身を傷ましむ。此に由りて、発慍まして、乃ち天石窟に入りまして、磐戸を閉して幽り居しめ。故、六合の内常闇にして、昼夜の相代も知らず。（日本書紀本文）

ここに見る如く、天上界でのスサノヲは、

○ 文化的秩序を乱す（農耕の妨害・機織の妨害）

○ 神聖なものを穢す（新嘗の妨害・また機織もこの場合神聖な行為である）

○ 統治者を一時的引退に追い込み、社会的な秩序を乱す

といった行動の故に、天上界から追放される。

このようにスサノヲは、存在・行為の全てが、あらゆる秩序の破壊者であり、そして二重に追放された者でもあった。

追放とは、その属する世界からの離別、もしくは分離にはかならない。従って、スサノヲが創造神である親神から追放されたのは親神の造り出した世界秩序の維持に与るべき三貴子の一として生れたにも拘らず、その本来あるべき世界から離別され、切り放された存在となったという事である。同時に、そのスサノヲの行くべき所である所からして根の国もまた、世界秩序の埒外にあるもの、つまり創造神の生み出した世界とは断絶した領域である事を示している。日本書紀の一書や古事記に、亡母を慕ったとあるのなどは、その母に当るイザナミが、この種の伝承の中では、スサノヲの出生時には既にイザナキの世界への敵対的な存在となつてゐる事からすれば、スサノヲは出生の当初から、明瞭に反イザナキ（反世界）的資質を示していた事になる。更に念の入つたことに、スサノヲは天上界からも離別されている。無論、親神の設定した三界のどこにも居場所が無いわけだが、先に述べたように、彼を追放した親神（黄泉国の伝承を含む所伝ではイザナキのみ）が天上界に属する事をも併せ考えれば、スサノヲは世界のうちでも殊に「天上界」と全く相容れない存在となつた事にならう。

ところがそのスサノヲは、天上界から根の国への途次、いったん出雲の地へ降ってヤマトノヲロチを退治し、そこで救つた女性クシナダヒメと結婚して、オホクニヌシを生ず。そして、各所伝ごとに様々な異同はあるが、記紀の全てに共通して、天

孫が降るべき地の平定の時、その交渉相手が専らオホクニヌシであるところからして、このオホクニヌシが地上国土の頭領としての位置を占めたと解せる。即ちここで地上国土は、全ての秩序からはみ出し、就中天上界とは相容れない存在である「秩序の破壊者スサノヲ」の血筋によって、代表される領域となったわけである。

つまりスサノヲは、記紀の世界にあつては「好もしからぬ存在」として追ひ払われた者であるわけで、従つてその世界でのオホナムチは、地上の王者であつたと同時に、「好もしからぬ者の子（子孫）」という事になる。さすれば出雲にとつて、「大国主」たる葦原中つ国の王者、「所造天下大神」としてのオホナムチ像こそは歓迎すべきものであるうが、それが「追ひ払われた者」の血筋に直系に連なる者であるという事は、決してありがたい事柄と見る事ができよう。

そしてこれは更に溯るならば、スサノヲが逐われる者となつたというのも、まず、「子」として父の思い通りにならなかつた事によつて、父神イザナキの怒りをかつたところに発している。言うなれば、「スサノヲがイザナキの子として生まれた」ところに、「逐われる者スサノヲ」の淵源がある。

結局のところ、出雲の側に立つて眺めた場合、記紀に展開しているイザナキ・スサノヲ・オホナムチという連なりは、出雲にとつて最も重要な神であるオホナムチの出自が、世界にとつて好もしくないところに発すると示している事になる。そこで、出雲国風土記の編纂に携つた者（達）は、前稿に見た如くオホナムチが地上国土の支配者であつたというところは取り入れながらも、この、イザナキ・スサノヲ・オホナムチという系譜については、敢えて記述の上に反映させる事をしなかつたのではないか。

再び繰り返すが、風土記には明らかに記紀的世界を反映させた記述があり、かつ、神々の親子関係を示す事は容易い事と思われるのである。そこからするならば、右の如く「書かれていない事」に大きな意味を見出だす事も重要な視点であろう。

6 「正」と「負」のはづれ——オホナムチのツマドリ——

前章では、記紀に共通して示されているオホナムチの系譜を取り上げたが、古事記にはいま一種、スサノヲとオホ

ナムチの関わりを表わす記事がある。

これは古事記にしか見えないという点で、出雲人の知見という面に問題を残すわけだが、^{注8}ともかく次のように記されている。

（オヲナムチが）須佐之男命の御所に参致れば、其の女須勢理毘売^{スセリビ}出でて見て、目合爲て、相婚ひたまひて、還り入りて、其の父に白しく、「甚麗しき神来ましつ。」とまをしき。爾に其の大神出でて見て、「此は葦原色許男と謂ふぞ。」と告りたまひて、（中略）家に率て入りて、八田間の大室に喚び入れて、其の頭の虱を取らしめたまひき。故爾に其の頭を見れば、呉公多なりき。是に其の妻、牟久の木の実と赤土とを取りて、其の夫に授けつ。故、其の木の实を咋ひ破り、赤土を含みて唾き出したまへば、其の大神、呉公を咋ひ破りて唾き出すと爲ほして、心に愛しく思ひて寝ましき。爾に其の神の髪を握りて、其の室の椽毎に結び著けて、五百引の石を其の室の戸に取り塞へて、其の妻須世理毘売を負ひて、即ち其の大神の生大刀と生弓矢と、及其の天の詔琴を取り持ちて逃げ出でます時、其の天の詔琴樹に拂れて地動み鳴りき。故、其の寝ませる大神、聞き驚きて、其の室を引き仆したまひき。然れども椽に結びし髪を解かす間に、遠く逃げたまひき。爾に黄泉比良坂に追ひ至りて、遙に望けて、大穴牟遲神を呼ばひて謂ひしく、「其の汝が持てる生大刀・生弓矢を以ちて、汝が庶兄弟をば、坂の御尾に追ひ伏せ、亦河の瀬に追ひ撥ひて、意礼大国主神と爲り、亦宇都志国玉神と爲りて、其の我が女須世理毘売を嫡妻と爲て、宇迦能山の山本に、底津石根に宮柱布刀斯理、高天の原に氷椽多迦斯理て居れ。是の奴。」といひき。故、其の大刀・弓を持ちて、其の八十神を追ひ避くる時に、坂の御尾毎に追ひ伏せ、河の瀬毎に追ひ撥ひて、始めて国を作りたまひき。

即ち、オホナムチがスサノヲの娘セリヒメと結婚した事になっている。

これに対して、出雲国風土記の記述からは、左に示した如くに神々の婚姻関係を復元できる。

これを見ると、オホナムチは特にツマドフ神として表われている事がわかる。そして、中でも最後の例（神門郡滑狭郷条による）は、求婚の相手の名がワカスセリヒメとなっている。しかもその父がスサノヲであって、一見、古事記の伝えるところと符合しているが如くである。

以上が両書に表われている事実である。

そこでまず、右に引用した古事記記載の伝を除いて考えるならば、出雲国風土記のスサノヲという存在については、

オホナムチ
オキツクシキ―ヘツクシキ―スナガハヒメ
(↑ミアヒ)

マストラガミ

カミムスヒ―キサカヒメ

オミヅノ―アカブスマイヌオホスミヒコサワケ

アメノミカタツヒメ

オホナムチ―アデスキタカヒコ

アメノミカタツヒメ

オホナムチ

カミムスヒ―アヤトヒメ

カミムスヒ―マタマツクタマノムラヒメ

オホナムチ

オホナムチ

スサノヲ―ヤノワカヒメ

オホナムチ

スサノヲ―ワカセリヒメ

△以上記載順▽

* (ミアヒ) (ツマドヒ) とあるのは婚姻譚

なるのか。

そこで右の古事記の記述を検討すると、当面の問題に関わる事柄として次の二点を指摘する事ができる。

前章で見た如く、イザナキ―スサノヲ―オホナムチという連なりを示さない事に、記紀的な「悪役スサノヲ」のイメージを間接的に否定する方向性を読み取る事もできるし、これは次回で論ずる予定だが、右の事と表裏をなすように、出雲国風土記に記されたスサノヲの姿は、記紀に見る如き「悪役」のイメージからは遠いものである。従って、あるいは出雲国風土記がその「悪役でないスサノヲ」という立場に拠るからには、オホナムチがスサノヲの娘をツマドフという伝承があれば、それはそれでありのままに録して支障はなかったとも言えようし、何よりも、出雲国風土記でオホナムチがスセリヒメをツマドフというのは、オホナムチにとって、数多くのツマドヒのうちの一つに過ぎないわけで、この記事が、記紀の系譜に見るような、スサノヲとオホナムチの密接な関係を特に示す事にはなり得ないだろう。

しかしまた一方で、もし古事記ないし古事記的な伝承が知られていた場合、この風土記記事に記された三神の名称の組み合わせが、先に引用した如き、オホナムチの根の国訪問に伴うスセリヒメとの婚姻譚を連想させる事は大いにあり得ただろう。その場合に風土記の立場からするとどう

第一に、古事記に記された話の中心は、オホナムチが岳父たるスサノヲのもとから神宝（大刀・弓・琴）を将来し、またスサノヲによって、葦原中つ国の王者たる事を保証されるところにあると言って良い。そして第二に、このオホナムチのセセリビメとの結婚というのは、同じ古事記に記された、スサノヲからオホナムチに至る系譜に、そぐわない面がある。つまり、前章で見たように、古事記では、スサノヲとオホナムチの間にヤシマシヌミからアメノフユキヌに至る五代をはさんでいる。従って、この婚姻は、同じ一柱の神（スサノヲ）の六代後の子孫と娘との結婚という事になるわけで、いかに神代の事とは言っても、系譜の面で不自然さを内包している事は否めないところであろう。^{注10}

これらの事からすれば、たとえ、古事記もしくは古事記的な内容の伝承が知られていたとしても、出雲国風土記の例からして、「スサノヲの娘セセリヒメにオホナムチがツマドフ」という、滑狭郷に伝わったものを記録する事に抵抗はおおえないですんだと思われる。なぜなら、この三神の名が古事記の伝承を呼び起こしたとしても、そのオホナムチの婚姻にまつわる内容は、オホナムチを国土の王者と認める事に関わるわけだから、それはそれで都合の悪からうはずはない。そして同時に、スサノヲをオホナムチの岳父であるとする事は、前章に見た如く、出雲にとって好もしくないはずの、スサノヲからオホナムチに至る系譜の「いかがわしさ」を、自ずと浮き彫りにする事すら可能となる効果を秘めているからである。

以上に見た如く、出雲国風土記の記述には、出雲にとって「都合の悪い事柄―負の面―」を記さないという傾向があると言って良いであろう。（未完）

〔本稿中、記紀の訓み下しは、日本古典文学大系本（岩波書店）によった。〕

注1 「大國主」をはじめ多くの亦名があるが、便宜上、全てオホナムチで統一しておく。

注2 前稿、P5～P6

注3 日本書紀の異伝には、スサノヲの別の系譜を伝えるものもあるが、そちらは以後の話の展開とは無関係になる。

注4 『出雲国風土記参究』（至文堂）

注5 一書第一には「五世の孫」と記しているが、これはスサノヲの子から数えての事だから、六世と同じ事である。

注6 風土記編纂の周辺にいた人々が、具体的にどのようなかたちで記紀の世界に触れていたかは不明なので、このような言い回しをしておく。以下同じ。

注7 拙稿「天孫降臨神話の担うもの」『学習院女子短期大学紀要XXII』所収。

注8 日本書紀と異なり、古事記が、当時の社会の中でどのように存在していたか不明な点が多いので、古事記にだけ見える所伝の扱いには慎重を要する。

注9 旧稿（『日本神話における出雲』『解釈と鑑賞54年1月号』所収）にも触れている。

注10 記紀を眺めると、古事記のヤマトタケルの系譜にも同様の問題点がある。